

作成: 芝崎

40. 高校時代の思い出篇 : 偶然な出会い(祖父の思い出)

父方の祖父は私が2歳の時に他界。祖父の記憶はないし、祖父のことは母から聞いた印象のみ。祖父は千葉/館山で旧制中学校の教師をしていた。私は高校が秋田で、その高校の図書館に本を借りに行った時、その図書館の管理している男性から、突然、声をかけられた。

「君は千葉/館山の出身ではないですか?」びっくりして、「私は違うが、父が館山出身」と答える。話している内に祖父の教え子であったことがわかった。彼が「芝崎」という苗字を覚えてくれたことで偶然な出会いであった。母から聞いていた祖父の印象は「物静かで優しい」であったが、彼が話してくれたことからほぼ一致して、当時の教師としては温厚さをもって生徒たちと接した事で彼の記憶に残っていた感じがした。彼は話の中で、「芝崎先生」ではなく、名前で「謙平先生」と呼んでいた為お互いに確認できた瞬間でもあった。祖父は生徒たちに慕われていたのだと感じられ、孫としてなんとも言えない微笑みとうれしさがこみ上げてきた。

笑いのポイント(笑点)

偶: (偶:ぐう) 然に意外な質問にびっくり!

然: (ぜん) ぜん、異なる場所で接点はなんだったのか? まさか祖父の教え子とは!

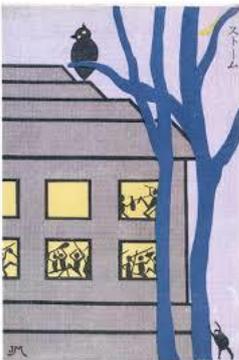
な: (な) んと、秋田と千葉/館山がつながった瞬間

出: 出(で) 会いとは不思議なもの

会: 会(あ) って、祖父の人柄にふれた

い: い(い) な、教え子に慕われていたんだと。

➡ 彼はよく祖父のこと覚えてくれたなあと、特に印象的だったのは祖父を名前で「謙平先生」と呼んでいた事だった。この出会いで、旧制中学では先生/生徒間で和気あいあいとした雰囲気があったのであろうか? ふと思う。私の中学、高校時代では先生を名前では呼ばなかった、生徒間では愛称で呼んでいた気がする。



以上



以上

